小　学　校

平成２４年度

教育研究員研究報告書

外国語活動

東京都教育委員会

目　　次

Ⅰ　研究主題について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1　主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2　研究主題についての基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　3　研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ　研究の方法
　1　基礎研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　2　実践研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　3　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　4　研究の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅲ　研究の内容
　1　事前調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　2　先行授業による課題の把握・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　3　検証授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　　(1)検証授業１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　　(2)検証授業２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　(3)検証授業３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　4　検証授業の結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

Ⅳ　研究の成果と課題
　1　成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　2　課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

研究主題

それを聞きたい　これを伝えたい
～伝え合う内容に意味をもたせる授業づくり～

Ⅰ　研究主題について

１　主題設定の理由

平成24年度より新設された小学校外国語活動は、外国語を通じて「コミュニケーション能力の素地を養うこと」を目標にしている。各小学校では、「英語ノート」や今年度新たに配布された“Hi,friends!”などを用いて、学級担任が中心となって授業を進めている。しかし、どのような授業を行えばよいのか、どのような授業によって目標を達成することができるのかなど、悩みを抱えている教員は多い。そこで、部員が５・６月に行った二つの授業とアンケート調査から、小学校外国語活動における課題を分析し、研究主題を設定することにした。

二つの授業を通して見えてきたものは、児童によってはゲーム等の活動に参加する意欲が高いものの、コミュニケーション活動になると進んで話したり関わろうとしたりする姿が減少し、発話する意欲や伝えようとする意欲が低くなったように見えてしまうということである。それは、単に意欲が低くなっているのではなく、児童が英語を用いたコミュニケーション活動に慣れていないことや、コミュニケーション活動を通して基本的な表現に慣れ親しむ際に、伝えようとする内容が形だけのやり取りにとどまってしまうことがあるからではないかと考えた。

児童に対するアンケート調査の結果において、外国語活動が好きな理由の１位が「ゲームが好き」であった一方で、２位が「将来役に立つから」、３位が「英語を話せるようになりたいから」であったことから、多くの児童は英語が話せるようになりたいと思っていることが分かった。

また、教員に対するアンケート調査の結果においては、約半数の教員が外国語活動の目標について十分理解していないと回答した一方で、半数以上の教員が授業の中で「児童の伝え合い」を重視していることが明らかになった。

これらの結果から、児童の「英語を話せるようになりたい。」という思いと、教員の「児童が英語で伝え合えるようになってほしい。」という思いをつなぐ有効な手だてが必要であることが見えてきた。

そこで、児童が進んでコミュニケーション活動をするようになるためには、児童が本当に「聞きたい」、「伝えたい」と思える活動を行わせることが重要であると考えた。それらの活動を通して、児童は「自分の考えを聞いてほしい。」と進んで伝えようとしたり、「相手はどんなことを考えているのだろう。」と進んで聞こうとしたりするようになる。コミュニケーション活動について児童の意欲を更に高めるためには、教員は授業の中で意図的かつ計画的に「児童が話したくなったり聞きたくなったりする、児童にとって、伝え合う内容に意味をもたせる活動」を設定する必要があると考えたのである。

これらのことから、本部会では、研究主題を「それを聞きたい　これを伝えたい　～伝え合う内容に意味をもたせる授業づくり～」と設定した。

２　研究主題についての基本的な考え方

(1)　研究の仮説

多くの教員が１時間の授業の中で、「話す活動」、「聞く活動」、「児童同士が伝え合う活動」を大切にしている一方で、「必然性のある活動」を大切にしている教員は少ないことが分かった（７ページのグラフ７・表２参照）。

また、「外国語活動が好きではない」と回答した児童の中で、多くの児童がその理由として挙げたものは「話すことが好きではないから」、「伝えたいことが伝えられないから」、「相手の伝えたいことが分からないから」であった（５ページのグラフ２・３参照）。

これらの結果から、多くの教員は意識的に「話す活動」、「聞く活動」、「児童同士が伝え合う活動」を設定しているが、それらの活動に必然性がないことが原因で、児童の意欲を向上させていないばかりか、意欲を低下させている可能性があるのではないかと考えた。

そこで、児童の意欲を向上させるためには、必然性のある活動が重要であると考え、次の仮説を設定した。

必然性のある活動を工夫すれば、児童の意欲を「聞きたい」、「伝えたい」という意欲に高めることができるだろう。

(2)　必然性のある活動にするための手だて

研究の仮説に示した必然性のある活動について、本部会では「児童にとって、伝える相手を意識しながら自分の思いを込められたり、相手の話を聞いてみたいと思ったりするような、自分の思いを伝え合うことができる活動」と捉えた。例えば、学級内でのコミュニケーション活動で、“I like soccer.”という学級の誰もが知っていることを発話するだけではなく、「ぼくはサッカー選手になって、子供たちに夢を与えたい。」と、自分の思いを相手に語るような活動である。このような活動を展開するために、先行授業を踏まえ、次の４点の手だてを考え、授業を通して検証した。

○　友達や社会との関わりの中で、伝えたい内容をもたせる。

○　単元の導入で、これからの活動で何をやるのか、最後にはどのようなコミュニケーションの場をもつのかというねらいや見通しを児童に明示する。

○　学級の実態に応じて、他教科や道徳、総合的な学習の時間や特別活動との関連を図る。

○　児童の「伝えたい」、「聞きたい」という意欲を高めるような振り返りの工夫をする。

３　研究の構想

外国語活動の目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

児童の実態

・外国語活動の時間を楽しいと感じている。
・英語を使ったゲームや歌などの活動が好きである。
・英語を聞いたり、話したりすることができるようになりたいと考えている。
・英語が分からないことに苦手意識をもっている。
・ゲームなどの勝敗にこだわり、めあてに沿った活動ができていない。
・できないことや分からないことが多いと感じている。

教師の実態

・授業において、聞く・話す・伝え合う活動を大切にしている。
・外国語活動の目標を踏まえた指導計画の作成や授業の実施において、学級担任の関わり方に大きな差がある。
・「コミュニケーション」の捉え方に個人差がある。

課題

外国語活動の時間を楽しく感じている児童の意欲を
「聞きたい」、「伝えたい」という意欲に高める必要がある。

研　究　主　題

「それを聞きたい　これを伝えたい」

～伝え合う内容に意味をもたせる授業づくり～

目指す児童の姿

「聞きたい」、「伝えたい」という意識をもって伝え合おうとする児童

研 究 の 仮 説

必然性のある活動を工夫した授業展開をすれば、児童の意欲を「聞きたい」、「伝えたい」という意欲に高めることができるだろう。

研　究　の　内　容

○基礎研究
　学習指導要領解説の内容を根拠にした児童と教員の実態調査とその分析
○先行授業
　先行授業を通した課題の把握と、必然性のある活動を促すための手だての考察
○検証授業
　必然性のある活動を促すための手だての有効性の検証と、改善策の検討

Ⅱ　研究の方法

１　基礎研究

外国語活動における現状把握等のため、学習指導要領解説の内容を根拠にした児童と教員の実態調査及びその分析を行った。

２　実践研究

児童と教員の課題把握のために、先行授業を実施した。さらに、課題解決に有効な手だて等を検証するために、検証授業を実施した。

３　研究のまとめ

検証授業の実施後に児童の振り返りカード等から授業の分析を行い、研究の仮説の妥当性とともに、「必然性のある活動」にするための手だての有効性について考察した。

さらに、検証授業における成果と課題を踏まえ、研究発表会当日の公開授業の指導案に、「伝え合う内容に意味をもたせる授業」を実施するための授業展開を示した。

４　研究の経過

月　　日	内　　容	会　場・授　業　者
４月２７日（金）	年間計画	東京都教職員研修センター
５月２４日（木）	研究主題等について協議	東京都教職員研修センター
６月２９日（金）	先行授業① “I can ~ . Can you ~ ”	中野区立谷戸小学校　第６学年 大川　由香里
７月　６日（金）	先行授業② “How many ~ ?”	練馬区立関町北小学校　第５学年 田村　希代子
７月３０日（月）	児童・教員の実態調査集計と分析	渋谷区立富谷小学校
８月１５日（水） ～８月１７日（金）	御岳宿泊研究会	青梅市御岳山　宿坊
９月　４日（火）	検証授業① “What time do you get up ?”	昭島市立拝島第二小学校　第６学年 松川　篤
１０月１０日（水）	検証授業② “What do you want ?”	目黒区立駒場小学校　第５学年 中嶋　美那子
１１月１４日（水）	検証授業③ “What do you want to be ?”	渋谷区立富谷小学校　第６学年 西　浩明
１２月２０日（木）	検証授業④、研究発表準備 “I can ~. Can you ~? ”	台東区立根岸小学校　第６学年 大島　賢
１月　４日（金）	研究発表会に向けて	目黒区立駒場小学校
２月１４日（木）	研究発表会	台東区立根岸小学校　第６学年 大島　賢

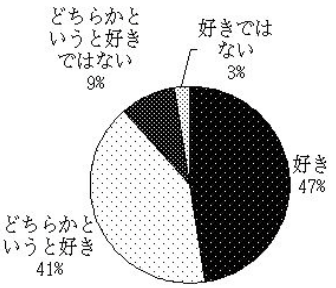
Ⅲ　研究の内容

１　事前調査

(1)　研究員の所属校及びその近隣の小学校におけるアンケートによる実態把握

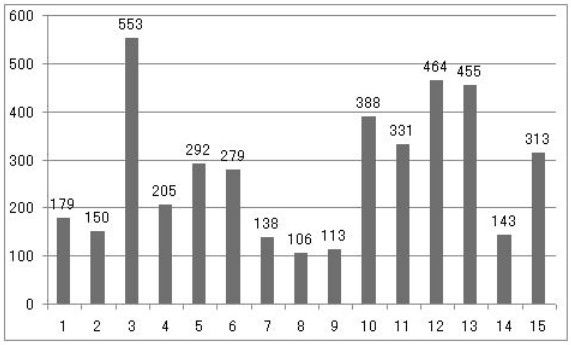
児童のアンケート結果から；調査対象 1,159 人

グラフ１　外国語活動は好きか

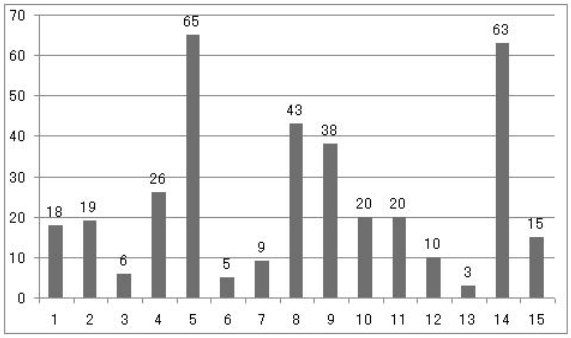


グラフ１から、調査対象である児童の８８．９％が「外国語活動が好き・どちらかというと好き」と回答していることが分かる。これは、文部科学省が実施した平成２４年度全国学力・学習状況調査において、各教科を「好き」と回答した割合（国語６３％、算数６５％、理科８２％）を大きく上回る数字となっている。

グラフ２「好き」又は「どちらかというと好き」と答えた理由（複数回答）



グラフ３「どちらかというと好きではない」又は「好きではない」と答えた理由（複数回答）



※　グラフ２及びグラフ３の横軸の数字は、表１で示した理由と合致している。

表１「好き・どちらかというと好き」の理由／「どちらかというと好きではない・好きではない」の理由

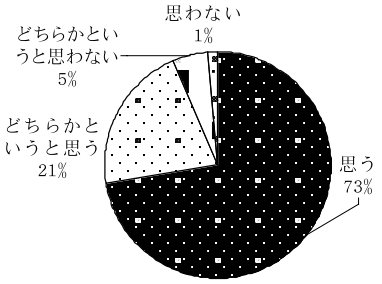
1	歌が好きだから/好きではないから	9	相手の伝えたいことが伝わるから/分からないから
2	チャンツが好きだから/好きではないから	10	他の国のことを知ることができるから/興味がないから
3	ゲームが好きだから/好きではないから	11	英語の言い方を知りたいから/そうは思わないから
4	外国語を聞くことが好きだから/好きではないではないから	12	将来英語は役に立つから/英語は使わないと思うから
5	外国語を話すことが好きだから/好きではないから	13	英語を話せるようになりたいから/なりたくないから
6	友達と関わることが好きだから/好きではないから	14	テストがないから /できないことや分からないことが多いから
7	ALT と関わるのが好きだから/好きではないから		
8	伝えたいことが伝えられるから/伝えられないから	15	何となく楽しいから/恥ずかしいから

グラフ２及び表１において、外国語活動が好きである理由の中で、最も回答が多かったのは、「ゲームが好きだから」であった。外国語活動は、体を動かしたり、ゲーム的な要素があったりすることから、児童に受け入れられやすいと考える。また、理由１０から、「他国に興味をもち、外国語活動を通じて他国のことを知りたい」と思っている児童が多数いることが分かる。理由１１～１３である「英語の言い方を知りたいから、英語は役に立つから、話せるようになりたいから」という理由を選んだ児童が多いことから、英語を話すことに憧れたり、実用的価値を求めたりする児童も多いと言える。

一方、理由５～９は、人と関わり合う活動であり、コミュニケーションの本質的な部分であるが、それを理由にした児童が少ないことから、外国語活動が、十分に児童の実態に即した活動になっていないことが推測できる。

グラフ３より、「好きではない・どちらかというと好きではない」と答えた児童において最も多くの児童が選んだ理由は、５の「話すことが好きではないから」であった。理由１４の「できないことや分からないことが多いから」、理由８の「伝えたいことが伝えられないから」、理由９の「相手の伝えたいことが何か分からないから」が以下に続くことから、外国語を好きではないと答えた児童の多くが、「何を話してよいか分からない。話す自信がない。相手の言いたいことが分からない。」と感じていることが分かった。

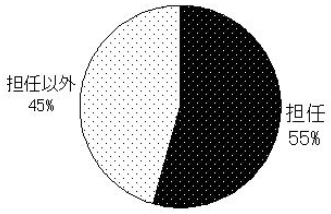
グラフ４　英語を話したり、聞いたりできるようになりたいか



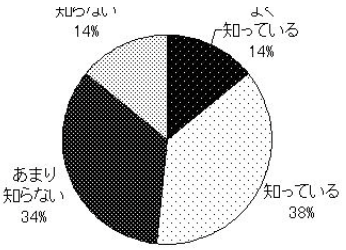
グラフ４から、好き嫌いに関わらず、調査対象の９４％が英語を話したり聞いたりできるようになりたいと思っていることが分かる。児童の興味や意欲を生かし、伝えたいことを伝え、聞きたいことを聞くことができるような手だてを講じることによって、児童が主体的に活動し、外国語活動の目標に迫ることができると考える。

教員へのアンケート結果から(調査数７７人)

グラフ５　外国語活動の授業は、誰が主体となって行っているか



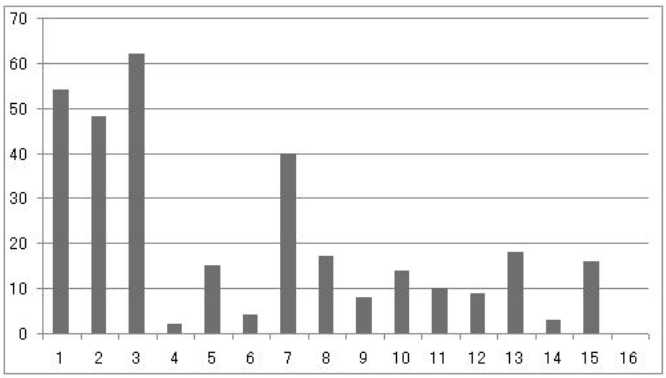
グラフ６　外国語活動について、学習指導要領の目標を知っているか



グラフ５から、外国語活動の授業を主体となって行っているのは、担任と担任以外の指導者がほぼ半々であることが分かった。本来は、担任が主体となって授業を行うものである。また、外国語活動の目標にあった活動をするためには、担任が学習指導要領の目標を理解した上で、活動を計画する必要がある。

ところが、グラフ６から、約半数の教員が学習指導要領の目標についてあまりよく知らないと思っていることが分かった。この結果から、一部の教員については、学習指導要領の外国語活動の目標を十分理解していない状況で授業を行っていることが考えられる。

グラフ７　１時間の授業で大切にしていること



※　グラフ７の横軸の数字は、表２で示した内容と合致している。

表２　１時間の授業で大切にしていること

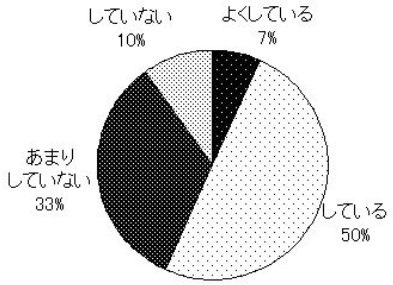
1	話す活動	9	日本語と英語の違いを知ること
2	聞く活動	10	必然性のある活動
3	児童同士が伝え合う活動	11	授業の組み立て方
4	単語等知識の定着を図る活動	12	ねらいに沿った活動
5	歌	13	Hi,friends!の活用
6	発表	14	英語ノートの活用
7	ゲーム	15	クラスルームイングリッシュ
8	外国のことについて学ぶこと	16	その他

グラフ７及び**表２**において、大切にすることの１、２、３を挙げた教員が大変多いことから、外国語活動におけるコミュニケーションの大切さを多くの教員が理解していることが分かった。

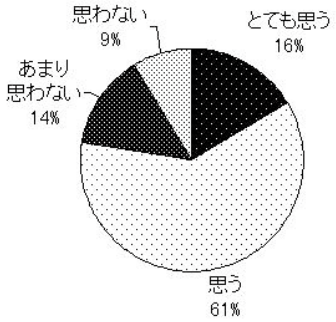
また、**グラフ８**から、半数以上の教員は、児童が「伝えたい」と思う内容を意識させた授業を行おうとしていることが分かった。

しかし、**グラフ７**及び**表２**においては、児童が「伝えたい」と思う内容を伝えるために必要だと思われる「必然性のある活動」は、選んだ人数が多い順から数えて１０番目である。この「必然性のある活動」は、授業作りをする場合、骨組みとなる大変重要な点であると考えるが、外国語活動において、多くの教員が重視していないことが分かった。

グラフ８　児童が「伝えたい」と思う内容を意識した授業展開をしているか



グラフ９　児童的に外国語活動に意欲的に取り組んでいると思うか



グラフ９では、７７％の教員が、児童が外国語活動に意欲的に取り組んでいると答えている。児童の９０％近くが外国語活動を「好き」と答えているので、授業展開を工夫することにより、意欲的に活動する児童が更に増える可能性があるのではないかと考える。

2 先行授業による課題の把握

(1) 中野区立谷戸小学校第６学年での実践

ア 授業の内容

(ｱ) 単元名 “Hi, friends! ２” Lesson３ “I can ~. Can you ~? ”

(ｲ) 単元の工夫

○ 第４時に向けての内容の工夫

伝えたい内容を伝えるための第４時“show & tell”に向けて、児童が「なんだろう？」、「おもしろそう！やってみよう！」、「わかった！できた！」と感じることができる内容を設定した。

○ 本時における活動の工夫

「伝えたい」という意欲を高めるための活動にする。知っていることを英語に変換して話す練習をするのではなく、自分が伝えた英語が相手に伝わることが喜びとなるような設定にした。また、架空の場面においてスポーツ選手になりきり、本来の自分が言えない事柄を多くのパターンで相手に伝えなければいけない活動になるよう、設定を工夫した。

(ｳ) 本時（３／４）の流れ

Warm up 挨拶、本時のめあての確認。絵本『From Head to Toe』の読み聞かせ

Activity 1 ジェスチャーゲーム

Activity 2 なりきり自己紹介ゲーム（スポーツ選手になりきって自己紹介する）

Follow up 振り返り、挨拶

(ｴ) 児童の感想

・外国人の友達が絵本を読んでくれて上手だった。

・いろいろなスポーツの言い方が分かって良かった。

・有名なスポーツ選手になりきってインタビューしたのは楽しかった。

・“I can ~ ”を使った言い方や意味が分かって良かった。

・ジェスチャーを入れながら話したので、分からないことも想像できた。

イ 考察

・自分が有名スポーツ選手になりきることで、より「伝えたい」という意識が高まった。反対に、自分自身のことでないと、意欲が長続きしない。

→自分の思いを伝えるための場の設定

・児童は、ゲーム性があると勝敗やできた数にこだわってしまう。

・ジェスチャーに頼りすぎると活動がねらいからそれてしまう。

→ねらいを明確に伝えたゲームやアクティビティの設定

・「～ができる」という表現を使いやすいスポーツ選手になりきったことで、自己紹介の中で何度も“I can ~”を使い、慣れ親しむことができた。

→繰り返し言わせる場面の工夫

・毎時間の目標はもとより、単元の最終目標を早い段階から知らせておくと活動自体が意味のあるものになり、より意欲が高まるのではないか。

→単元全体を見通した活動内容の工夫

(2)　練馬区立関町北小学校第５学年の実践

ア　授業の内容

(ｱ)　単元名　　“Hi, friends!　１”　　Lesson３ “How many?”

(ｲ)　単元の工夫

○　第４時の活動の工夫

本時の最後に、児童の身近で数に表せるものを“秘密の数字クイズ”として作成する活動を設定し、児童の「やってみたい」、「作ってみたい」という意欲の喚起を図る。

○　本時における活動の工夫

おはじきゲームでは、多くのおはじきを集めるという数を競うゲームでだけでなく、ラッキーアイテムを集める活動も取り入れる。同じゲームの中で手法を変えて行うことにより、無理なく活動に取り組めるという安心感をもたせるとともに、意欲の持続を図る。また、単元を通して毎時間、ある国の“数字”を聞く活動を設け、児童の興味･関心を高めるとともに、比べながら聞く視点を育てていく。

(ｳ)　本時（２／４）の流れ

Warm up	はじめの挨拶、歌
Practice･Listen	計算ゲーム、How many ゲーム
Activity　1	伝言ゲーム、おはじきゲーム
Activity　2	外国の数字を聞く活動
Follow up	振り返りカード、歌、終わりの挨拶

(ｴ)　児童の感想

・おはじきゲームで友達とたくさん関わりながら、ラッキーアイテムを取ることができてよかった。

・伝言ゲームで、ポイントは少ししかとれなかったけれど楽しかった。

・スペインの数の「８」が、日本語の「お茶」に似ていてびっくりした。

イ　考察

・児童は友達と関わりが多くもてる活動を好むことが分かった。→関わり合う場の確保

・活動を振り返ることで、児童は次時への意欲を高めた。また、児童は振り返りカードに記入することで、友達のよいところに目を向けるようになった。→振り返りの工夫

・同じ表現を短時間の中で繰り返し聞かせることによって、児童は、英語表現を音そのものでよく聞き取るようになった。　→繰り返し聞かせる場面の工夫

・めあての提示や、活動途中の教師の声かけによって、児童は、ゲームの勝敗のみにこだわらず活動そのものを楽しむようになった。　→ねらいを意識しためあての提示

(3)　先行授業から得られた課題

・児童同士が関わり合う場において、伝え合う内容が自分自身のことでなかったり、日常生活からかけ離れたものであったりすると、児童の意欲は減退する傾向にある。

・活動のねらいが明確に示されていないと、活動全体における児童の発話量が減り、児童同士の関わりや意欲の高まりが見られなかった。

3 検証授業

(1)　検証授業１

ア　単元名　“Hi, friends!　２”　Lesson６　“What time do you get up?”

スペシャルな一日！計画を知らせよう

イ　単元の目標と評価規準

目標（ｱ）世界には時差があることに気付き、世界の様子に興味をもつ。

（ｲ）積極的に自分や友達の一日を紹介したり、聞き取ったりしようとする。

（ｳ）生活を表す表現や、一日の生活についての時刻を尋ねる表現に慣れ親しむ。

評価規準　※網掛けは重点項目

ア　言語や文化に関する気付き	イ　コミュニケーションへの関心・意欲・態度	ウ　外国語への慣れ親しみ
①世界には時差があることや、世界はつながっていることに気付いている。	①自分や友達の一日を伝わるように工夫して紹介している。 ②友達が伝えようとしていることを聞こうとしている。	①一日の生活の時刻を尋ねたり答えたりしている。

ウ　単元の内容

（ｱ）主としてコミュニケーションに関すること。

・インタビューを通して自分と相手の思いを伝え合い、他者理解を深めること。

・友達の一日を発表することを通して、発表する楽しさを体験すること。

・発表する際には、「なぜ、伝えようとするのか」を明確にして相手に伝わるようにすること。

・友達へのインタビューや発表は積極的に聞いて、その内容を理解することの大切さを知ること。

（ｲ）主として言語や文化に関すること。

・世界の様子に関心をもち、一日の生活において、日本とは時差があることに気付くこと。

・インタビューや発表練習をする活動を通して、英語の音声やリズムに慣れ親しむこと。

エ　指導計画（５時間扱い）

時間	活動内容	評価規準
1 本時	行ってみたい国を調べ、世界には時差があることに気付き、時刻の言い方を知ることで、本単元に興味・関心をもつ。	ア－①
2	時刻の言い方や時刻を尋ねる表現に慣れ親しむ。	ウ－①
3	生活を表す表現やその時刻を尋ねる表現に慣れ親しみ、友達と伝え合う活動をする。	イ－①②
4	ペアを組んだ友達と伝え合う活動を通して、発表練習に取り組む。	イ－①②
5	相手に伝わるように、意欲的に友達の生活を紹介しようとする。	イ―①②

オ　本時の指導（１／５時間）

本時の目標

世界には時差があることに気付き、時刻の言い方を知ることで、本単元に興味・関心をもつ。

主な活動

二重線と点線の枠で記した箇所は、本時の目標に関わる内容

○評価・留意点

Warm up

1　挨拶・めあてや見通しの確認

2　「世界の時刻を知ろう」

・世界時計を見て気付いたことを発表する。

・世界時計を使い時差を知る。

・時差を知って感じたことを発表する。

・atで時刻の表現ができることを知らせる。国ごとに時差があることで、世界がつながっていることに気付かせる。

○世界に時差があることに気付いたか。

ア－①行動観察、振り返りカード

3　ナンバーゲーム

・指導者から１～60の数を聞く。

・１～60の数を言う。

Activity

4　「先生の一日を知ろう」

・時刻を聞き取る。

・時計に数字や針を発表する。

・事前に用意した校長先生の一日を指導者が紹介し、児童に誰かを当てさせる。本単元の目標(ｲ)を確認する。

・本単元の最後に、一人ずつ前に出て友達を紹介することを伝える。

○先生が伝えようとしていることを聞こうとしていたか。

イ－②行動観察、振り返りカード

5　チャンツ※

“What time do you get up?”

・ＤＶＤのチャンツ※を行う。

※チャンツ

英語のリズムと音声に合わせて発話することを通して、時刻の尋ね方や言い方に慣れさせる活動

6　リスパンド※ タイム

・“I get up at～”の表現を知る。

・“I get up at～”の表現を使って、任意に選んだ３人と活動を行う。

※リスパンド

相手が“I get up at six.”と言った時に、自分が“You get up at six.”と応答するような、相手が話した表現の“I”を“You”に変えて表現する活動

・一語一語をゆっくりと発音したり気持ちを込めて発音したりすることで、伝えるイメージに変化が起きることを体験させる。

・英語の発話自体の中にも必然性と意味が含まれることを捉えさせる。

○意欲的に起きた時刻を尋ねたり言ったりしていたか。

ウ－①行動観察、振り返りカード

Feed back

7　振り返り

・振り返りカードを書き、自分の思いが伝えられたかを振り返る。

8　挨拶

活動に必然性をもたせるための手だて

社会科との関連

活動2より　「伝えたい内容をもたせる」

世界中の国、時差の紹介

- 大型液晶テレビに、ネット上の世界時計を映して、世界には国ごとに時差があることを確認し、時刻に関心をもたせる。
- 深夜にロンドンオリンピックを見たことがある児童の話を聞き、時差を確認することで、体験から時刻への関心を喚起する。
- 地球儀を見せながら、国ごとに時差があることで、地球は自転していて、現在時刻の違いがあることに気付かせる。

時差をはっきりと示せるように、時計の文字を見やすいように大きく写す。

活動4より　「活動の見通しをもつ」

インフォメーションギャップ

- 「ある先生の一日です。いったい誰なのでしょうか？」と言い、聞く活動の意欲を高め、本時の活動のワークシートに時刻を書き込ませる。
- 指導者がジェスチャーを交え、抑揚とアクセントを強調し、気持ちを込めて楽しく話すことで、児童に関心をもたせる。

「情報格差」を積極的に取り入れることで、知らない情報を知りたくなるようにする。

単元を見通した活動計画の提示

- 本単元の最後には、ペアごとに教室の前に出て友達の紹介をすることを知らせ、英語で伝えてみようとする意欲を高める。

活動の目的意識を高め、意欲的に行うための場をはっきりと明示する。

活動6より　「伝えたい内容をもたせる」

リスパンド※効果

- リスパンド※をすることで、相手を認めながら、話を聞く意識を高める。また、応答することで伝わった実感を味わい、話す意欲を喚起する。
- 時刻を言うときには、ジェスチャーを使うとよく伝わることを確認する。
- 本時の活動のワークシートに友達の起床時刻を書き込ませる。

互いに認め合うことの大切さを伝え、丁寧にリスパンド※を行い合う場を大事にする。

(2) 検証授業２

ア　単元名　“Hi　friends！１”　Lesson６　“What　do　you　want？”

友達にネームボードをプレゼントしよう

イ　単元の目標と評価規準

目標（ｱ）アルファベットの大文字について知り、身の回りで使われていることに気付く。

（ｲ）積極的にアルファベットの大文字を読んだり、欲しいものを尋ねたり答えたりしようとする。

（ｳ）アルファベットの文字とその読み方とを一致させ、欲しいものを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。

評価規準　※網掛けは重点項目

ア　言語や文化に関する気付き	イ　コミュニケーションへの関心・意欲・態度	ウ　外国語への慣れ親しみ
①身の回りにはアルファベットの大文字で表現されているものがあることに気付いている。	①アルファベットを積極的に読もうとしている。 ②相手の欲しいものを尋ねたり、自分の欲しいものを答えたりしている。	①教師やＡＬＴ、ＣＤの発音をよく聞き、大文字のアルファベットを見ながら発音している。 ②教師やＡＬＴ、ＣＤの発音をよく聞き、欲しいものの尋ね方や答え方を発話している。

ウ　単元の内容

（ｱ）　主としてコミュニケーションに関すること。

・「何が欲しいか」の尋ね方や答え方の表現を用いて、友達との交流を図ること。

・「友達のため」に活動することを通して、意欲的に交流し、感謝の気持ちや思いやりの気持ちを表現すること。

（ｲ）　主として言語や文化に関すること。

・アルファベットについて興味をもち、使われている物を探そうとすること。

・アルファベットの大文字の読み方を知り、表記と一致させて発音することに慣れ親しむこと。

・「何が欲しいか」の尋ね方や答え方について慣れ親しむこと。

エ　指導計画（５時間扱い）

時間	活動内容	評価規準
1	身の回りにあるアルファベットの大文字について気付く。	ア－①
2	ゲームやチャンツを通して、アルファベットの大文字を発音する。	ウ－①
3	“What　do　you　want?”“～please.”の表現に慣れる。	イ－②
4	何が欲しいかを尋ねたり答えたりして、ネームボードを作る。	イ－①②
5 本時	ネームボードを仕上げた後、ネームボードのプレゼント交換をする。	イ－①②

オ　本時の指導（５／５時間）

本時の目標

アルファベットの大文字に親しみ、積極的に欲しいものを尋ねたり、答えたりする。

主な活動

二重線と点線の枠で記した箇所は、本時の目標に関わる内容

○評価・留意点

Warm up

1　挨拶・めあてや見通しの確認

2　ABC ソング

・アルファベットを指しながら、リズムに乗って歌う。

・アルファベットの発音を確かめるとともに、活動への意欲を高める。

3　チャンツ

“What do you want？”

・クラスで考えた、オリジナルチャンツを行う。

・メインアクティビティでのやりとりに慣れさせる。

・オリジナルチャンツで意欲を高める。

・簡単なアルファベットで作られている言葉があることに気付かせる。

Activity

4　「ネームボードを作ろう」

・アルファベットコーナーでアルファベットの大文字に親しみ、シールを集めたり、相手に欲しいものを尋ねてシールを渡したりする。

ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄｺｰﾅｰ→ “What do you want？”

集める児童　→“～please”

○英語を使って友達の欲しいものを尋ね、正しいアルファベットシールを渡すことができたか。

○アルファベットシールを集めるために英語を使って尋ねたり答えたりすることができたか。

イ－②行動観察、振り返りカード

5　「プレゼントタイム」

・前時と本時で完成させた友達のネームボードを交換する。

“This is for you. Here you are.” “Thank you.”

渡すときの言葉や、お礼の言葉を相手に言って、プレゼントを交換することができるように促す。

Feed back

6　振り返り

・今日の振り返りカードを書く。

・単元全体を通して、児童に身に付いたコミュニケーションの態度や、活動で友達を思いやった良さなどを伝え、次の単元への意欲を喚起する。

7　挨拶

活動に必然性をもたせるための手だて

図工との関連

活動４より「伝えたい内容をもたせる」

アルファベットコーナーの設定

・相手に“What do you want？”と、どのアルファベットが欲しいか積極的に聞くことができるように、お店形式のコーナーを設定する。

プレゼント作り

・“～，please”と発話しながら、友達と関わり、積極的にアルファベットを集めることができるように、ネームボードのプレゼント作りという目的をもたせる。

アルファベットシールの工夫

・互いに聞こうとしたり、伝えようとしたりする意欲が高まるように、アルファベットの文字の色や模様の種類を増やし、選択の幅を広げる。

・考える時間を与えることで、友達を思いながらアルファベットとより深く長く関われるようにする。

ペア作りは、生活班や他教科でのペアを活用したり、男女にしたりするなどの工夫をする。

アルファベットで、クラスの名前を掲示するなど、「分かる」安心感をもたせることが大切である。

会話の量を増やすことにもつながる。（会話量の確保）

相手意識や目的意識が明確である、必然的なコミュニケーション

活動５より「伝えたい内容をもたせる」

気持ちの交流

・それぞれの児童が、相手を思って作ったことに気付かせ、友達のプレゼントに感謝できるよう助言する。

・互いに讃え合えるよう、グループごとに集まり、友達の前で交換させる。

・渡す言葉、お礼の言葉はもとより、”Nice!” “Wow！”などの言葉が言えたら褒める。

全体で show＆tell 形式の交換会をする際には、交換会の時間を十分に取れるように、活動４までの時間配分を考慮する。

(3)　検証授業３

ア　単元名　“Hi　friends!　２”　Lesson８　“What　do you want to be ?”

夢宣言をしよう。そのビデオをタイムカプセルに入れて未来の自分に届けよう。

イ　単元の目標と評価規準

目標（ｱ）世界には様々な夢をもつ同年代の子供がいることを知り、英語と日本語での職業を表す語の成り立ちを通して、言葉のおもしろさに気付く。

（ｲ）積極的に将来の夢について交流しようとする。

（ｳ）どのような職業に就きたいかを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。

評価規準　※網掛けは重点項目

ア　言語や文化に関する気付き	イ　コミュニケーションへの関心・意欲・態度	ウ　外国語への慣れ親しみ
①世界には様々な夢をもつ同年代の子供がいることに気付いている。 ②職業を表す語について英語と日本語の共通点に気付いている。	①将来の夢について積極的に伝え合っている。	①職業を表す語を聞いたり言ったりしている。 ②就きたい職業について尋ねたり、答えたりしている。

ウ　単元の内容

(ｱ)　主としてコミュニケーションに関すること。

・将来どのような職業に就きたいかを尋ねたり答えたりする表現を用いて、友達と積極的にコミュニケーションを図ること。

・将来就きたい職業に加えて、どうしてその職業なのか、またどのような思いをもっているのかについて、「夢宣言」という活動の中で、できるだけ既に慣れ親しんでいる英語表現や身振り等を用いて、積極的に伝え合おうとすること。

(ｲ)　主として言語や文化に関する気付きに関すること。

・世界には様々な夢をもつ同年代の子供がいることに気付くこと。

・職業を表す語について、英語には語尾に er や ist が付くものが多く、日本語には「家」や「士」等が付くものが多いといった共通点に気付くこと。

エ　指導計画（４時間扱い）

時間	活動内容	評価規準
1	様々な職業の言い方や、“I want to be～.”の表現を知る。 世界の子供たちのなりたい職業を知る。（以下、毎時の終末に行う）	ア－①②
2	職業の言い方や、“I want to be～.”“ What do you want to be? ”の表現に慣れ親しむ。自分がなりたい職業をどのような表現を使って発表するかを考える。	ウ－①②
3 本時	将来の夢について友達と積極的に伝え合ったうえで、次回の発表がよりよいものになるよう、発表の内容や仕方についてアドバイスし合う。	イ－①
4	ペアになっている友達とインタビュー形式で夢宣言を行い、クラスで取り組んでいるタイムカプセルに入れるものの一つとしてＤＶＤに録画する。	イ－①

オ　本時の指導（３／４時間）

本時の目標

夢宣言に向け、将来就きたい職業やその理由について、友達と英語を交えて伝え合う。

主な活動

二重線と点線の枠で記した箇所は、本時の目標に関わる内容

○評価・留意点

Warm up

1　挨拶・めあてや見通しの確認

2　チャンツ

“What do you want to be?” “I want to be a～” の表現を取り入れた職業名チャンツを行う。

・児童が実際につきたい職業名をチャンツに取り入れることで、児童の活動への意欲を高める。

3　だれの夢でしょうクイズ

・本校のどの先生の子供の頃の夢かを当てるクイズを行う。

・教師はある先生の子供の頃になりきりって、１人称で夢を話す。児童が教師に質問する形式でやりとりを進めるが、これが本時のアクティビティの練習となることを児童に知らせておく。

Activity

4　インタビュータイムで、将来就きたい職業やその理由を伝え合おう

A：What do you want to be?
B：I want to be a～
A：Why?
B：I like～/I can～/ I have～
それと…（日本語での説明も加える）
This is my dream!
A：Thank you. You can do it!

アドバイスタイム

・次回の夢宣言＆タイムカプセル用ビデオ録画に向け、発表の内容や仕方について、グループ内でアドバイスし合う。

○将来の夢について積極的に伝え合うことができたか。
イ－①行動観察、振り返りカード
・インタビューのペアは事前に決めておき、前半、後半で聞き手、話し手が入れ替わるようにする。
・本時までに夢宣言で発表する内容について準備しておく。教師やＡＬＴから個別に必要なヒントをもらったうえで、本活動に臨めるようにする。

5　世界の子供たちの夢クイズ

・世界の小学生の就きたい職業ランキングから、国や地域を推測する。

○世界の子供たちの様々な夢について気付くことができたか。
ア－①行動観察、振り返りカード

Feed back

6　振り返り

・振り返りカードには、将来の夢について、友達と活動の中で伝え合った内容や、授業の感想を記録するように伝える。

7　挨拶

活動に必然性をもたせるための手だて

総合的な学習の時間との関連

教師が一人一人の夢を大切にする姿勢を示すことで、児童の中にも互いを認め合う雰囲気が生まれるようにする。

活動２より「伝えたい内容をもたせる」

児童の実態を踏まえた語彙選び

・希望者の多い職業名はもちろん、たった１人が希望する職業であっても、児童の実態を踏まえて、扱う語彙を選択する。事実を扱うことで活動に意味が生まれ、児童の意欲が高まる。

先生方の子供の頃の写真を活用したり、当時のエピソードなどを短く紹介したりすることで、児童の関心を高める。

活動３より「伝えたい内容をもたせる」

身近な先生方の子供の頃の夢を紹介

・児童に身近な先生方が子供の頃に実際に描いていた夢についてインタビュー形式で紹介する。児童の「知りたい」という意欲が、「尋ねてみよう」、「返答を注意深く聞こう」という態度に結び付く。

自発性から生まれる必然的なコミュニケーション

児童が伝えたいことの全てを英語で言わせようとする必要はないが、児童の要望にはできるだけ応える。

活動４より「活動の見通しをもたせる」

児童の自発性を引き出す活動設定

・次回「夢宣言」を録画し、タイムカプセルに入れるという設定を確認する。

・教師は“I want to be～”の表現が使えれば目標達成であると伝えながらも、児童の「こんなことも伝えてみたい」という自発性を褒め、励ます。支援として、I like～/ I can～/ I have～/という既習の表現の使用を促し、日本語の使用も認める。

共通のめあてに向かって友達同士でアドバイスし合う

・「夢宣言」に向け、友達同士でアドバイスし合う場面を設定する。夢を英語で伝えるという目標に向かって、協力して取り組む雰囲気を作る。

アドバイスについては、次のような観点を示しておく。

①“I want to be～”の表現が言えているか。

②夢宣言に向け、付け加えるとよいものはないか。

③目線や声の大きさが適切か。

4 検証授業の結果と考察

検証授業では、「必然性のある活動を工夫した授業展開をすれば、児童の意欲を『聞きたい』、『伝えたい』という意欲に高めることができるだろう。」という仮説を検証するために、「伝え合う内容に意味をもたせる」手段として、「活動のねらい」を児童に明確に伝え、「児童にとって必然性があると思われる活動」を授業で展開した。その結果を次の二つの視点で整理し、考察した。

○ 授業を通して、児童の「聞きたい」「伝えたい」という意欲が高まったかどうか、振り返りシートを用いて測る。 ○ 担任が想定した「必然性のある活動」をしている児童の姿を見取る。

(1) 児童の変容（個人）【●振り返りシートから　○外国語活動における担任の見取りから】

ア　日常的に「外国語活動が苦手又は自信がない」と感じている児童の場合

＜検証授業１について＞

(ｱ)　Ａ児

● 「自分から進んで友達に話そうとしましたか。」に対する回答が１回目は１０段階中の３だったが、５回目では９になった。

● 「ぼくは楽しかったです。理由はちゃんと話せたからです。次も楽しみたい。」、「ちゃんと英語を言えるようになってよかった。」と記述していた。

● 発表会の目的を自分で考えたとき、「楽しく英語をしゃべる。」、「もっと仲良くなる。」と考えていた。

○ 普段はあまり積極的になれないタイプだが、回を重ねるごとに、積極的に友達とコミュニケーションを取ろうとするようになった。

(ｲ)　Ｂ児

● 「自分から進んで友達に話そうとしましたか。」に対する回答が、１回目は１０段階中の３だったが、５回目は７になった。

● 「英語をもっとできるようになりたいと思いました。」と記述していた。

● 発表会の目的を自分で考えたとき、「友達のことをよく知ろう。」と記述していた。

○ 外国語活動に苦手意識のある児童だが、５回目には進んで話をしようとする態度が見られた。

＜検証授業２について＞

(ｳ)　Ｃ児

● 第３時では、話したいことが３段階中の２であったが、ネームボードを作る活動を始めた第４時では、３段階中の３になった。

● 「“Ｔ”を売るお店をやって、たくさんの人が来てくれたから、たくさん英語を話せた。」と記述していた。

○ 普段は一生懸命に活動しても、なかなか結果に結び付かないために自信を失いがちであるが、今回は、時間ごとにめあてを明確にしたことで、視点をもって自分の活動を振

り返り、自分の良かった点に気付くことができて、自信につながった。

(ｴ)　Ｄ児

● 第１時から第４時まで、聞いてみたいこと・話したいことが３段階中の１だったが、第５時になり、自分がお店をやると、両方とも３段階中の３に上がった。

● 自由記述が第１時、第２時は少なかったが、第３時から、具体的にできたことや楽しかったことを記述していた。

○ 授業が進んでいくごとに、自分ができたことを自分で認められるようになり、最後のプレゼントタイムがにぎやかで楽しかったと記述していた。友達との交流に活動の良さを見いだしていた。

＜検証授業３について＞

(ｵ)　Ｅ児

● 「友達に英語で話してみたいことが話せましたか。」に対する回答が、１回目は「あまり話せなかった。」であったが、３回目は「話せた。」と記述していた。

● 自由記述欄に「最初インタビューするって聞いて、言えるか不安だったけど、先生がアドバイスをくれたから言えた。友達からアドバイスをもらったから、ビデオをタイムカプセルに入れる日までに言えるようにしたい。」と記述していた。

● ３回目に「ちゃんと英語が言えて楽しかった。」と記述していた。

● 「友達に得意なことを聞きたいし、自分のことも教えてあげたい。」と記述していた。

○ 活発に活動することが少ない児童だが、進んで友達に話しかけていた。

(ｶ)　Ｆ児

● 「友達に英語で話してみたいことが話せましたか。」の回答が、１回目は「あまり話せなかった。」であったが、３回目は「話せた。」であった。

● 「楽しかったこと」の記述が、１回目は「ゲームが楽しかった。」であったが、３回目は「みんなのやりたい仕事が分かったことが楽しかった。」であった。

○ 「勉強は得意だが、外国語活動にはあまり積極的になれない。」と感想を言ったことがある児童だが、自分の夢をワークシートに一生懸命書いて、英語で話そうとしていた。

イ　日常的に「外国語活動が好き、自信がある」と感じている児童の場合

＜検証授業１＞について

(ｱ)　Ｇ児

● 「自分から進んで友達に話そうとしましたか。」に対する回答が、１回目は１０段階中の７だったが、５回目は９だった。

● 「次回はもっと自分から『ハロー』と言えるようになりたい。」と記述していた。

● 「最も楽しかったのは、世界の時刻です。時差があることによって、『日本が未来にいる』と思いました。これからもいろんな国のことを知って英語を楽しみたいです。」と記述していた。

○ どの授業でも意欲的に取り組むが、特に時差について興味をもち、授業が終わった後も進んで質問をしていた。

(ｲ)　H児

● 「１から６の言い方が不安だったんですけど、今日、自信がもてました。英語の楽しさが分かりました。もっと声を出したいです。」と記述していた。

● 「友達の起きた時刻や寝た時刻を英語で聞けるって鼻が高いです。先生の授業は、楽しいです。」と記述していた。

● 「二人で練習をして、だいぶすらすら言えるようになりました。友達のスペシャルなことが分かって楽しかったです。発表会が楽しみです。」と記述していた。

○ 英語を話したり聞いたりするときに、身を乗り出して積極的に参加する姿が見られた。

＜検証授業２＞について

(ｳ)　Ｉ児

● 自由記述では、めあてに沿った振り返りをし、「アルファベットがよく分かりました。『何が欲しいですか。』と聞くことが楽しくなりました。」と記述していた。

● 授業中に、「友達からプレゼントを渡されたときが楽しかった。」と言っていた。その際の活動の振り返りは、３段階中の３に花丸が付いていた。

○ どの活動も積極的に取り組んでいたが、友達に教えてあげたり、ゲームの時に率先して協力し合ったりと、コミュニケーションを楽しむ様子がうかがえた。

(ｴ)　Ｊ児

● 第３時では、話したいことや聞きたいことが３段階中の１や２に落ち込んだが、最後の第５時では、どちらも３段階中の３になった。

● 「友達に『分かった』を『OK』と言えばいいんだよと、教えてあげた。」と記述していた。

○ 帰国子女の児童であるが、毎時間において、英語を使ったやりとりや活動を楽しんでおり、友達と積極的にコミュニケーションをとっている姿が見られた。

＜検証授業３について＞

(ｵ)　K児

● 「友達に英語で話してみたいことが話せましたか。」に対する回答が、１回目は「あまり話せなかった。」だったが、３回目は「話せた。」であった。

● 「動画を撮ったとき、一回目はつっかえたり日本語のところを言うのを忘れてしまったりしたけど、２回目はよくできたのでよかったです。」と記述していた。

○ 「友達に英語で話してみたい。」という意欲が高まった姿が見られた。

(ｶ)　L児

● 「友達に英語で話してみたいことが話せましたか。」に対する回答が、１回目は「あまり話せなかった。」だったが、３回目は「話せた。」であった。

● 「みんなの将来の夢を聞きたい。」と記述していた。

● 楽しかったことに、１回目は「カードを取るゲーム」と記述していたが、３回目は「友達の夢を聞くこと。」、「自分の夢を言うことやインタビューすること。」と記述していた。

● 「友達に野球がやりたいか聞きたい。」と記述していた。

○　普段は感情をあまり出さないが、回を重ねると「楽しくなってきた。」と気持ちを表現していた。

(2)　学級全体の児童の変容

＜検証授業１について＞

「夏休みの出来事」を話す展開を考えたが、授業は夏休み後にあったので、話す内容を夏休みに限定しなかった。代わりに「秘密の時間」というものを設定し、児童が自由に自分や友達の起床時間や就寝時間について発表し合えるようにした。その結果、「もっと話したい。」と児童が言い、授業時間を延長した経緯があった。

＜検証授業２について＞

授業者が他の学年の学級を使って授業を実施したため、最初は児童が緊張している様子が見られたが、アルファベットシールを集めて友達にプレゼントをするという目的がはっきりすると、回を重ねるごとに積極的に発話をし、活発に活動していた。

＜検証授業３について＞

最初はタイムカプセルの提案について「面倒くさい」という反応だったが、回を重ねると「早くやりたい」という反応に変化した。

(3)　四つの手だてと「必然性のある活動」との関連

手だてを講じたいずれの検証授業においても、児童から「友達のことを聞きたい。」、「もっと話したくなった。」等の声が上がるなど、意欲を高めた姿が見られた。

(4)　考察

(1)から(3)の結果から、担任が設定した「必然性のある活動」は、児童にとって「友達の話を聞きたい。」、「自分のことを英語で話したい。」という意欲を高めるために有効であると考える。さらに四つの手だての中で、特に「友達や社会との関わりの中で、伝えたい内容をもたせる」手だてを講じることが、授業の展開に大きな影響をもち、児童の意欲の高まりにつながることが分かった。

また、話せるようになるためには、ある程度の発話量が必要となるが、最初はうまく話せなくても、聞きたいことや伝えたいことがあると、児童は意欲的に基本的な表現に慣れ親しんでいく。

さらに、単元を通した目標や見通し、本時の活動のめあてが明確になると、児童は何をするのかが分かり、意欲につながることが分かった。

活動の最後に、めあてに対して自分がどうだったのかを振り返らせることは、次時への意欲につながっていたが、児童に記述させるための時間が必要になるため、工夫して時間を確保する必要がある。

Ⅳ　研究の成果と課題

１　成果

(1)　研究の仮説の妥当性

研究の仮説 　必然性のある活動を工夫すれば、児童の意欲を「聞きたい」、「伝えたい」という意欲に高めることができるだろう。

必然性のある活動を取り入れた三つの検証授業において、児童が活動に取り組む様子や振り返りカードなどから、「聞きたい」、「伝えたい」という意欲を高めたことが分かり、仮説の妥当性を認めることができた。

(2)　「必然性のある活動」にするための手だての有効性

ア　友達や社会との関わりの中で、伝えたい内容をもたせる。

児童にとって身近な友達や社会を題材にしたり、友達と関わらせたりすることで、活動に対する興味を児童にもたせ、友達の話を聞こうとする意欲を高めることができた。

また、伝える相手を明確にすることにより、相手に伝えようという意欲を高めることができた。

授業の展開の中で、この手だてを講じる割合が最も多く（12 ページ、15 ページ、18 ページ参照）、四つの手だての中では児童に対する影響が一番大きかった。

○　“Hi,friends!　２”　Lesson６　“What time do you get up?”では、児童が互いに朝起きた時間を発表し合う場面を設定することで、時刻に関心をもたせ、一日の生活を発表することへの意欲を高めることができ、児童にとって必然性のある活動となった。

○　“Hi,friends！２”　Lesson８　“What do you want to be ?”では、身近な先生たちが子供の頃に描いていた夢を取り上げることで、聞く意欲を高めるとともに、自分の夢について考え、発表することへの意欲を高めることができ、児童にとって必然性のある活動となった。

○　“Hi,friends!　１”　Lesson６“What do you want?”の授業では、お店形式のアルファベットコーナーを設定することで、たくさんの友達と関わりながら、積極的に何が欲しいか尋ねたり、欲しいアルファベットや色などを積極的に伝えたりすることができ、児童にとって必然性のある活動となった。

イ　単元の導入部で、これからの活動で何をやるのか、最後にはどのようなコミュニケーションの場をもつのかというねらいや見通しを児童に明示する。

単元の最後に行う活動を単元の導入の段階で示すことにより、児童に単元全体の見通しをもたせることができ、英語で伝えてみようとする意欲を高めることができた。

○　“Hi,friends!　１”　Lesson６　“What do you want?”の授業では、単元の最後にクラスの友達にネームボードをプレゼントすることを第１時で示した。プレゼント作りという目的をもたせることにより、児童が積極的にアルファベットを集めることができており、児童にとって必然性のある活動となった。

○　“Hi,friends!２”　Lesson６“What time do you get up?”　では、単元の最後に「友

達紹介」をすることを第１時で知らせ、時刻や生活を表す表現の発話量を確保するための目的意識を高めることができ、児童にとって必然性のある活動となった。

ウ　学級の実態に応じて、他教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動との関連を図る。

他教科等で学習したことと外国語活動を関連させることで、児童の興味・関心を高めるとともに、「前に活動したことの一部を、英語で伝える。」という思いをもつことができ、児童にとって、必然性のある活動となった。

○　“Hi,friends!　２”　Lesson６“What time do you get up?”　では、社会科の学習と関連付け、大型液晶テレビにネット上の世界時計を映して、世界には国ごとに時差があることを確認し、時刻に関心をもたせることができた。

また、児童にとって身近な話題であるロンドンオリンピックを取り上げ、深夜にテレビでロンドンオリンピックを見たことのある児童の話を聞き、体験を喚起することで、時差を確認することができた。

○　“Hi,friends！２”　Lesson８“What do you want to be ?”では、総合的な学習の時間に将来就きたい職業や夢について各児童が考えたことを基にして、本単元では「どうしてその仕事に就きたいのか。」、「その仕事に就いてどんなことがしたいのか。」といったように考えを発展させた。伝えたい内容について深めさせることができ、児童にとって、必然性のある活動となった。

エ　児童の「伝えたい」、「聞きたい」という意欲を高めるような振り返りの工夫をする。

児童が授業を振り返り、それによって教師が児童の変容を見取ることができるような振り返りカードを作成した。このカードには、友達に伝えられた（伝えたい）ことや友達に聞けた（聞きたい）ことなどの内容を記入する欄を設けた。このことにより、児童の意欲の高まりや変容を教師が把握することができるようになるとともに、児童の「聞きたい」、「伝えたい」という意欲を次時に向けて、更に高めていくことができた。

以上のことから、「必然性のある活動」にするための四つの手だては、児童が自分の思いを伝え合いたいと感じ、児童にとって伝え合う内容に意味をもたせることができ、児童の「聞きたい」、「伝えたい」という意欲を高めるために有効であることが検証できた。

２　課題

検証授業で高まった「聞きたい」、「伝えたい」という児童の意欲について、単元が変わっても持続させる必要がある。そのため、他の教科と“Hi,friends !”を関連付けた系統表を作成することも視野に入れ、他の単元においても、四つの手だてを取り入れた必然性のある活動の授業案を作成する。そして、より多くの教員が必然性のある活動を取り入れた授業づくりを展開できるようにする。

検証授業において児童の振り返りの場面で使用したカードは、記入するのに時間を要したため、改善する必要がある。また、使用しやすいカードの作成とともに、教員の声かけによるような、カードを使用しない振り返りの方法についても、研究していく必要がある。

平成２４年度　教育研究員名簿

小学校・外国語活動

地区	学校名	職名	氏名
足　立　区	弥　生　小　学　校	主任	○吉　田　　啓
台　東　区	根　岸　小　学　校	主任	○大　島　　賢
目　黒　区	駒　場　小　学　校	主任	中嶋　美那子
渋　谷　区	富　谷　小　学　校	教諭	西　　浩明
中　野　区	谷　戸　小　学　校	主幹	大川　由香里
練　馬　区	関町北小学校	主任	田村　希代子
昭　島　市	拝島第二小学校	主任	松　川　　篤
東村山市	久米川東小学校	教諭	中　野　　剛

○世話人

〔担当〕
東京都教職員研修センター研修部教育経営課
指　導　主　事　　市川　　茂
東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課
統括指導主事　　深尾　絵美子

平成２４年度
教育研究員研究報告書

小学校・外国語活動

東京都教育委員会印刷物登録
（平成２４年度第２４３号
平成２５年　３月）

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８８２
印 刷 会 社　株式会社　イマイシ